

吉川佳英子 『『失われた時を求めて』と女性たち』（彩流社、2016）

マルセル・プルーストは、女性をどのように創造し、女性を通して何を表現したのだろうか。

女性登場人物に注目しながら『失われた時を求めて』を読むという試みはこれまで、さほど、なされていなかった。女性登場人物は多いので、むろん読者の視野には、つねにその像はしっかり存在してはいるのだが、おそらく他の大きいテーマに先に目がいく余り、ややその存在がかすむきらいはあった。

本書ではこれまでの研究ではあまり触れられることのなかった脇役とはいえ、物語進行上、大きな役割を担う女性登場人物に着目している。

20世紀を代表する小説『失われた時を求めて』は、作者プルーストによって幾重にも推敲を重ねられている。その構想がどのように変更されていったのか、プルーストの意図は何であったのかを、本書は草稿から決定稿に至るまで、女性登場人物を主軸に据えて探っている。

そのうえで、彼女たちが体現するサロンや芸術、セクシュアリティのテーマを論じ、女性登場人物によってしか表わすことのできなかつた小説空間を分析している。

また、同時代の作家コレットとの性や生のテーマにおける比較から、二人が交錯する地平も明らかにしている。

プルーストもコレットも同性愛にかかわりのある人生を送ったが、それは彼らの作品にも反映されている。コレットはプルーストが描く女性同性愛の場面の不十分さを指摘している。コレットが考えている女性同性愛の本質、すなわち同性間の「類似性」をプルーストは視野におさめていない。男性同性愛と女性同性愛が必ずしもシンメトリーでない旨が、同時代の二人の作家をすり合わせることで浮かび上がってくる。

このように当時タブーとされていた性のありように光を当てることで、二人の作家たちは、それまでの安定した性の関係を揺さぶり、小説に新たな可能性をもたらすと言えるだろう。

（著者自身による紹介）

